香川大学教育学部 附属教育実践総合センターニュース

No. 33　　平成 23 年 3 月 31 日発行

目　次

特集　第 11 回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて　1
研究発表グループ報告　2-4
平成 22 年度初等教育研究発表会報告　5
第 94 回附属坂出小学校教育研究発表会報告　6
第 56 回附属幼稚園研究発表会報告　7
第 3 回香川大学教育学部特別支援教育研究大会報告　8
平成 22 年度センター公開講演会報告　9
センター研究会報告　10
フレンドシップ事業報告　10
センター協議会報告　11
教育実践集中講座 実践報告　11
センター活動報告・寄贈図書　12
教育実践総合研究第 23 号 原稿募集　13

特 集　第 11 回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて

～学部・附属学校園の新たな連携・協同をめざして～

副学部長　山神眞一

2 月 22 日（火）、梅のつぼみがほころぶ頃、第 11 回学部・附属学校園合同研究集会が教育学部 611 講義室と研究者交流スペースを会場に総勢 196 名(学部 83 名・附属学校園 113 名)の参加を得て、盛大に開催されました。

全体会冒頭で有馬道久学部長からは、学部・附属の連携は、この合同研究集会の充実に裏付けられており、その成果は日常的で協同的な関係性へと発展してきていることが述べられました。

今回の研究集会では、新しいスタイルをいくつか導入して実施致しました。一つには、個別発表をポスター発表形式に変更したことです。研究者交流スペースに 12 の研究課題の個別発表を一同に集めてポスターでの発表スタイルにすることで、討論も活発化し、色々な研究課題を見聞きできたように思います。さらに、全体会・全体討論を個別発表の前に行い、全体の士気が高まるように心がけました。

全体会での「教育実習カリキュラムの改革に向けた現状と課題 Part Ⅱ」のテーマに関しては、七條正典・附属教育実践総合センター長より基調提案があり、中教審特別部会の教員養成改革の報告や本学部・附属学校園における教員養成改革に向けた取組の現状を紹介した後、センター研究プロジェクトである「教育実習事前・事後における意識の変容」と「教育実習の評価」、あるいは教育実習自己評価カードの開発に関する報告・提案がなされました。そして、教育実習がより充実したものとなるためには、教育実習の工夫改善だけでなく、事前・事後指導や学部教員の協力による指導体制、他の授業科目との関連等を十分検討する必要があることを指摘されました。フロアーからは、特に附属学校園の教育実習担当教員から教育実習の評価や学部教育のカリキュラムに関する質問や意見が多数述べられました。

また、「学部・附属教員の連携による研究推進の在り方」については、特別支援学校の大西祥弘先生と附属坂出小学校の山内秀則先生から、それぞれ附属学校の立場からみた研究推進の在り方に関する発表をして頂きました。両先生からは、学部教員と附属学校教員との双方向の関係性と研究推進の日常化の重要性が語られると共に学生・院生の附属学校園との関わり方に関する現状と要望が述べられました。

12 題の個別発表の内容は質的にも向上し、ポスター発表形式ということもあり、学部教員と附属学校教員相互の活発な意見交換がなされました。その後、行われた懇親会にも 100 名を超える参加があり、有意義な親睦のひとときでした。

この合同研究集会は、今後も学部と附属学校園が、互いに手を携えて、さらに新たなる充実した連携・協同を目指して、日々切磋琢磨していくべきであると改めて念じる機会となりました。

研究発表グループ報告

WikiWeb2.0を用いた美術教育実践力の育成

安東恭一郎、附属高松小・中、附属坂出中

合同研究集会では、学生たちが学部授業の一部を附属高松小学校で実践する授業の取り組みについて発表しました。

今回の研究発表会では附属学校園の先生方との共同で学部授業・図画工作教育法の学生たちが附属高松小学校で授業実施する場面を、WebWiki2.0というシステムを用いて支援していただいた過程と効果について報告しました。

合同発表を通して学部と附属学校の先生方だけではなく、附属学校同士の教員間の連携も強まり、今後も学部と附属全体で共同研究を進めていくことを確認しました。（写真:学部生による附属高松小学校での一斉授業）

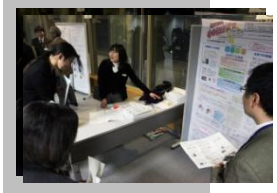
‘数学的活動’を活かした指導に関する研究 —資料の活用、関数領域を中心として—

風間喜美江、附属坂出中

「与えられた問題を解いて答えを求められるようにすることだけではなく、基礎的・基本的な知識及び技能を習得し、それらを活用して問題解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をはぐくむこと」をめざし、‘数学的活動’と‘活用’に視点をおき、教材開発や実践についての研究に取り組んだ。特に、関数、資料の活用領域を中心とした。「関数」領域では、第１学年の導入の具体的な事象の考察を通して伴って変わる２つの数量の関係を調べ、班で説明や意見交換から関数関係の意味の理解を深める授業実践などを発表した。「資料の活用」領域では、選択数学で事象から見いだした相関関係について、３年の通常授業で標本調査について、身近なデータから班の中での意見交換を通して考察を深める授業実践などを発表した。ポスターセッションという発表形態で、研究交流や意見交換がスムースに交わされた。

ロールレタリング技法を用いた中学生の心の健康教育

毛利　猛、附属高松中



現代では、少子化や核家族化の進行、地域の遊び集団の衰退、電子メディアの普及による間接的な関係の増加などにより、直接的な対人関係を学ぶ機会が減少し、人との関わりが苦手な子どもが増加しています。

そこで附属高松中学校では、養護教諭と担任が協力して、「人間関係力の育成」を目指した心の健康教育に各学年で取り組みました。1年生はエゴグラム、2年生はロールレタリング、3年生はアサーショントレーニングというカウンセリング技法を用いた実践を行いました。当日の合同研究集会では、2年生を対象としたロールレタリング技法を用いた取り組みを中心にポスター発表しました。

アクションラーニングの手法を国語科での話し合い活動に取り入れた場合の問題点と可能性に関する検証

山本茂喜、附属坂出中

アクションラーニング(以下 AL)は、「リーダー育成、チーム・ビルディング、組織開発を効果的に行う問題解決手法」である。その中核となる AL 会議は、「意見や考えを述べさせることよりも、質問とリフレクションを重視する」点で従来の意見会議とアプローチの仕方が異なる。

この「質問と回答のみで進む」手法が、国語科の「自分の読みを構築する」過程でも有効に働くと考え、授業研究を行った。生徒同士の「質問—回答」で授業を展開するクラスと、「討論」で展開するクラスを比較した結果、「質問—回答」の方が、思考の枠組みの変化が起こりやすいことが分かった。質問しあう中でメタ認知を働かせていく AL の手法の有効性が確認できた。

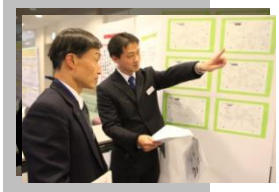
学部教員と附属学校園教員とのC･T授業(collaborated teaching)による ESD授業の開発

伊藤裕康、附属高松中

伊藤は、2003年度より附属坂出中学校の先生方と協業による社会科授業づくりを行って来ている。今では、公開研究会の授業づくりに事前に関わることができるようになった。かねてより、附属高松中学校の先生方とも授業開発を行いたいと思っていたところ、2010年度、附属高松中学校の北堀宏教諭と三野健教諭と協業による授業の開発に一歩踏み出すことが出来た。協業による授業開発は、附属高松中学校社会科部教員のニーズに沿う学部教員と附属学校園教員とのC・T授業（Collaborated Teaching）によるESD（Education for Sustainable Development＝持続発展教育）授業の開発を行っている。学部教員と附属学校園教員との信頼関係の構築に努め、2011年度の附属高松中学校の公開研究会における研究授業づくりに関わっていきたい。(写真：伊藤による飛び込み授業「小京都とはなにか？」)

ビジュアル・ツールとワークショップ形式を用いた国語科「活用」型学習の実践的研究

山本茂喜、附属高松小



私はこれまで、ビジュアル・ツールを活用した国語科学習について、附属高松小・中の山村勝哉教諭・藤崎裕子教諭と共同研究を行う機会を継続していただくことができた。今回は山村教諭とともに、ビジュアル・ツールを活用した国語科学習の場面に、ライティング・ワークショップという新しい方法を取り入れることを試みた。

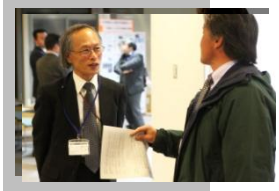
ライティング・ワークショップとは、「書くこと」に、「作家」としてのリアルな体験を取り入れて組織化する方法である。アメリカにおいては盛んに実践されているが、我が国ではまだまだ新しい方法である。

研究集会では、小学三年生が、「俳人」となり、マインドマップなどのビジュアル・ツールを活用して句作を行う実践について発表した。

今回は初めてのポスター発表ということもあり、十分な発表と質疑ができなかったことは残念だが、数々の貴重な助言をいただくことができた。さらに共同研究を深化させていきたいと思っている。

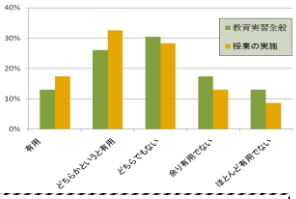
教育実習生のための教育実習自己評価シートの開発

長谷川順一、附属高松小・坂出小



教育実習自己評価シートの開発研究は今年度で３年目です。１年目には附高小で調査を行い、その結果をもとに２年目には２種類の自己評価シートを作成し附高小で使用しました。そして今年度は、附坂小でも用いるようにしました。

実習終了時に実施したアンケート結果をみると、「記入する時間がない、授業後の指導で十分、だからシートはなくてもいい」といった意見もありました。実習生に自己評価の意義理解をより促す必要があります。一方、「目標が明確になった、伸びが感じられた」といった記述もみられました。そのような意見がさらに増加するようにすること、また他校種でも使用可能なシートにすることも今後の課題です。



認識と行動の統一を促す道徳教育の在り方研究

山下真弓、附属高松小

本研究では、道徳の目標として新たに追記された「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成するものとする。」に焦点を当て、第一学年の道徳の時間の授業の在り方を探究した。

授業実践を進めるごとに、魅力ある資料の選択や活用の仕方の重要性と、類型からみた児童への教師の細やかな関わりの必要性を強く感じた。今後も道徳の特質を踏んだ授業展開の研究を深め、児童の道徳性を豊かにすることをさらに求め続けたいと考えている。そして、附属高松小学校の認識と行動を統一する力を求める「ふれあい学習」の成果にもつなげたい。

附属学校理科室を活用した教員養成のための実習プログラムの開発

北林雅洋、附属高松小・中、附属坂出小・中

理科領域以外の学生の希望者を対象とした「小学校理科基本実験習得コースの試行」を通して、(1) 附属小学校理科室の活用の可能な形態、(2) 試行する実習の内容の適切性、問題点、(3) 学生が参考にする実験・観察ガイドシートの基本的な形式、について検討を加えた。2010 年 11 月～2011 年 1 月に、附属高松小学校と附属坂出小学校で各 2 回、大学で 13 回の実習を行なった。附属小学校の理科室を活用した実習をより効果的なものにするためには、参加学生がより主体的に取組めるような改善点など、可能性と課題が明確になった。

理科教育充実のための認知促進プログラムの検討

笠　潤平、附属坂出中

英国の Cognitive Acceleration through Science Education(科学教育を通じた認知促進)プロジェクトは、理科の授業を通じて(ピアジェのいう)具体的操作段階の児童・生徒の形式的思考段階への成長を促進するプロジェクトである。その教材“Thinking Science”は、理科における変数に関する観点(その関係・制御・交互作用・複合的な変数など)の確立をはじめ、分類・比例・確率・相関などの思考操作を用いる諸活動を意識的に配置している。この教材に学んだ理科授業の開発を目指す本研究は、研究代表者が本学に赴任した 2007 年度以来、続けられてきた附属坂出中学校理科教員との共同研究の一環である。本年度は、同校のシャトル学習の時間を利用した、「変数に着目した探究学習」という単元名で、科学者の視点にふれ、研究の楽しさを知る、探究の方法(変数・条件制御)を身につける、結果より変数同士の関係を明確にできる」の 3 点を学習の目標とする 14 時間分の授業案を実践することができた。

我が国や郷土の伝統音楽の指導に関する研究

岡田知也、附属坂出中

新学習指導要領では、表現や鑑賞の活動の支えとなる指導内容が〔共通事項〕として示されており、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取って思考・判断する力の育成が一層重視されている。また、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を深め、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに諸外国の音楽文化を尊重する態度の育成を重視することがあげられている。以上をふまえ、和楽器を活用して日本の音楽や伝統芸能、民謡等から教材を開発し、多様な音楽や音楽文化を理解し尊重できる態度の育成を目指し授業に取り組んだ。今後は、言葉や音楽によるコミュニケーションの図り方についても実践を積み、生徒同士の伝え合う活動の活性化を図る方法についても研究を進めたいと考えている。

バランスのよい４技能の習得をめざして　―Dictogloss という言語活動を通して―

竹中龍範、附属坂出中

現在、附坂中英語科が取り組み、研究している学習方法が《Dictogloss：文章復元練習》である。《Dictation：聞き取り》から発展したもので、まとまりのある文章を Listening して、それを同意となる英文に復元するのである。そこにはかなり正確に文意を捉える Listening skill と、捉えた内容を文意から逸れることなく正確に英文に起こす Writing skill(文法力・語彙力も含まれる)が試される。その「復元」までの過程で、(Listening に際して) 多くの情報量を含む英文を、たった２回という情報把握の機会しか与えられないとしたら、英語を得意とする生徒でもなかなか一人でまとめきることはできず、生徒同士が「支え助け合い、分かち合う」ことが必然的に必要となる。意図的に学習ハードルを設定することで“Dictogloss”という学習法が「主体的に学び高め合う交流学習」を生み、バランスのよい４技能の習得を目指した総合的な英語力の育成に効果があるのではないかと考えている。

生徒は交流学習ということで、ともに学ぶ楽しさも実感している。また、「理解」から「表現」へスムーズに流れる言語活動が、生徒たちの学習意欲を高めており、特に Listening skill や　Writing skill の向上を肌で感じ取っている。もっと、このつながりのあるバランスが取れた学習法を磨き、生徒の力に変えていきたい。

附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎「初等教育研究発表会」報告

附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎

本年２月３・４日に附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎の「初等教育研究発表会」が開催されました。当日は、香川県はもとより全国から多くの方々にご参会いただき、盛会裏のうちに終了することができました。学部の先生方には、指導・助言にあたっていただいたり、授業を参観しご意見をいただいたりしましたこと、心より感謝申し上げます。また、学生の皆さんにも支援していただきました。本当にありがとうございました。

附属高松小学校では「自ら学び、自信をもって共に伸びる子の育成～『習得・活用・探究』をつなぐ指導と評価～」を研究テーマとし、問題解決の過程にかかわる思考に焦点をあてるとともに、その様相を見て取る評価の在り方も併せて検討・研究を行ってきました。さらに、問題解決にかかわる思考を、批判的思考と創造的思考の２つの側面から捉え、特に創造的思考を促す指導や学習活動の在り方を検討してきました。研究発表会では、教科学習、ふれあい活動、楷の木活動、外国語活動など全カリキュラムにおける授業を公開し、それらを通して本校の研究提案を行いました。

問題解決は、古くて新しい教育の課題です。「問題」とは何か、その解決過程にはどのような思考が関与し機能しているか、それを促すにはどのような教育的働きかけが必要か、そもそも学校教育で問題解決を取り上げる意義は何かなど、様々な観点からの検討がなされてきました。本校でも、そのような観点を含みつつ協議し、それぞれの授業に即して指導を具体化し、さらにパフォーマンス課題とルーブリックによる評価の在り方について検討してきました。今後は、これまでに実施してきた授業や、そこで用いられたルーブリックの適切性や妥当性などについて、具体的に検討を進める必要があります。

附属幼稚園高松園舎では、昨年度に引き続き「幼小をつなぐ」を研究テーマとし、幼小連携に焦点を当て、附属高松小学校と連携・協同して取り組んできました。研究発表会当日には、４歳児保育を公開しますとともに、５歳児と小学校１年生がいっしょに活動する保育・授業を公開しました。幼小連携は教育の今日的課題の１つであり、高松園舎と高松小学校が協同して開発したカリキュラムは既に全国に向けて発信されていますが、その有効性の検証は、今後さらに時間をかけて取り組む必要があります。

附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎では、教育の今日的課題を見据えつつ、明日の教育の在り方を実践的視点から検討し研究を続けますとともに、実践を通して提案していきたいと考えています。今後とも、ご助言・ご支援のほど、よろしくお願いいたします。

第 94 回　附属坂出小学校 教育研究発表会報告

香川大学教育学部 附属坂出小学校

１月 27 日（木）、28 日（金）の２日間、標記研究会が開催されました。「知の更新をめざした『思考力』の育成（２年次）－言語活動を充実し、思考様式を共有化する授業づくり－」のテーマのもと、知が更新される過程と関連付けながら「思考力」を育成する授業モデルを提案しました。北は北海道、南は九州と広く日本全国から、延べ 1300 名以上の先生方の参会を頂き、盛会裏に終えることができました。

【ステージ上での全体授業】

今年度は、２年次研究の成果として、大きく３つのことを子どもの姿を通して提案しました。思考に有効に働く言語活動を設定すべきタイミングは、自力解決の前後に位置付く「見通し」「振り返り」の場であること、情動を伴う体験が、「個の言語活動」の裏付けとなり個々の「実感・納得」へとつながること、集団の考えを発展させる「集団での言語活動」は、板書による支援によって集団としての「承認・合意」が図られることの３つです。

参会された多くの先生から、「『思考力』育成には、自力解決とその前後の言語活動が大切ということに納得した」「個々の子どもの『実感・納得』をめざした言語活動、それを実現する教材開発が素晴らしい」「集団での『承認・合意』をめざした言語活動、その支援として板書の重要性を確認できた」「『実感・納得』『承認・合意』を通して図られる思考様式の共有化は、遅れて進む子どもにとって考える有用な手がかりとなる価値ある試み」等、高い評価をいただきました。

また、１日目午後には、「評価から探るこれからの英語活動の在り方」という演題で直山木綿子先生（文部科学省教科調査官）のご講演がありました。２日目午後には、水戸部修治先生（同教科調査官）、澤井陽介先生（同教科調査官）、吉川成夫先生（同視学官）、村山哲哉先生（同教科調査官）に、評価から探る学習指導の改善についてご講演いただきました。さらに、４名の先生方にパネラーとして登壇いただき、直前の体育館全体授業を巡ってシンポジウムを開催しました。参会者から「大変具体的で、４月までにするべきことが見えた」「新しい評価から学習指導の改善を図る大切さが分かった」「教科の枠を超えた思考に働く言語活動の話が興味深かった」等の声が聞かれ、大変好評でした。

【シンポジウム「『思考力』を育成する言語活動の在り方」】

残された課題として、リフレクションで主な話題となった「思考の系統や発達段階に応じた言語活動の在り方」が挙げられます。職員一同、寄せていただいている期待の大きさに感謝の気持ちを忘れず、日々の実践から精進を重ねようと決意を新たにしました。関係各位の研究会に際してのご指導、ご協力に対して深く感謝申し上げます。

第 56 回　附属幼稚園 研究発表会報告

香川大学教育学部 附属幼稚園

1　研究会の概要

期　日　平成２３年１月２８日（金）９：００～１６：１０

内　容　公開保育、全体会（開会式と研究経過報告等）、年齢別分科会

講　演　「協同する体験における自己目的の重要性」

東京家政大学教授　戸田　雅美　氏

参加者　県内外より２５０名程度

2　研究主題とその解説

研究主題　「協同への歩みを探る」～保育の構想と実践を考える～

昨年度より研究テーマを「協同への歩みを探る」とし、「幼児が友だちと共通の目的を見い出し、協力・工夫して遊ぶようになるための指導の在り方」について検討している。その際、本園の発達観である３つの関係づくり･･･「ものやこと」への興味関心の深まりの中で、「人」との関係も豊かに育まれ、同時に「自分」を振り返りながら集団の中で自己発揮する姿に至る･･･の考えのもと研究を進めている。昨年度は、３歳から６歳における**＜協同への育ちの過程＞**を整理してまとめたが、今年度は、この育ちを見通した上で、それぞれの時期の今の充実を図るための『保育の構想と実践』『**＜協同への育ちの過程＞**そのものの見直し』を進めた。また、『小学校を間近に控えた接続期の在り方』についても検討した。

3　今年度の研究内容と成果

[A]　＜なわとび遊び＞

先生との関係を心の拠り所としていた子どもたちも、友達を嬉しい存在と感じるようになった。友達が楽しく跳べるように、縄の揺らせ方を考えている。
―互いの思いが共有できるよう、じっくりと遊ぶ場の保証、様々な楽しさを味わえる遊びの提供を大切にしている―

[B]　＜一つの目的に向かって＞

夕涼み会で力を合わせる楽しさを経験した子どもたちは、ハロウィンパティーに向けて、主体的に自分の考を伝え合ったり、声をかけ合ったりしながら進めている。
―自分たちの力で達成した充実感を味わえるような活動と支援を大切にしている―

＜協同への育ちの過程　（2010 年度版）＞

下線部は今年度見直し、修正した箇所

	Ⅰ期　初めての集団の中で様々な環境に出会う時期		Ⅱ期　遊びが充実し自己を発揮する時期		Ⅲ期　人間関係が深まり学び合いが可能となる時期　＜接続期＞	
人	私と先生 ・先生を心の拠り所として安心する。 ・友達を感じる。	私と先生と友達 ・先生や友達とのやりとりを楽しむ。 ・友達と場やイメージを共有する。	友達と私 ・気の合う友達と共感したり葛藤したりする。 ・いろいろな友達とかかわっていこうとしたり、相手の思いを感じたりする。[A]	仲間と私 ・仲間と心を合わせて遊ぶことを楽しむ。 ・他者の持ち味を認め合う。	仲間の中の私 ・同じ目的をもち、興味のあるところでかかわったり、役割を意識してかかわったりすることを通して、協力工夫して進める楽しさを知る。[B]	・交流活動を通して、小学生の姿に憧れや魅力を感じる。 ・集団での伝え合いを通して友達の表現のおもしろさやその人なりのよさを感じる。
ものやこと	触れる・親しむ ・心の拠り所となるものやことが見つかり、安心して遊ぶ。	興味・関心 ・したい遊びを見つけ、心ゆくまで遊ぶ。	試行錯誤・工夫 ・いろいろな遊びを楽しみ、ものやことに親しむ。 ・遊びを工夫する。	・繰り返し遊ぶ中で遊びの見通しをもつ。 ・楽しく遊ぶための多様な方法を考えたり取り入れたりしていく。	追究・創造 ・これまでの経験を生かしたり、新しいやり方を生みだしたりして遊びや生活を進める。	・交流活動を通して新しいことや難しいことに興味・関心をもち、かかわろうとする。 ・言葉や数の世界への関心が高まり、進んで使っていこうとする。
自分	安心 ・安心を感じて少しずつ自分を出し始める。	自己発揮 ・自分からかかわっていこうとする。	葛藤・振り返り ・自分の存在を感じ、はりきって自分を出す。	・友達と自分の思いの狭間でたじろぎ、振り返る。	集団の中での自己発揮 ・集団で取り組む充実感を味わったり、その中で自分らしさを発揮したりする楽しさを味わう。	・大きな自信を感じ、自分を誇らしく思う。

4　今後の研究課題

２年間の研究成果を生かし、本園の教育の柱である教育課程を協同の視点から再編していくことを課題とし、さらに協同の質を高めていきたい。

第３回　香川大学教育学部特別支援教育研究大会報告

特別支援教育研究大会実行委員会
香川大学附属特別支援教室すばる

研究大会の概要

2011（平成 23）年 3 月 5 日に、サンポートホール高松を会場に行った。大会テーマは、「特別支援教育の充実：発達障害児を対象とした根拠のある指導と評価をともなう支援」とした。大会日程は、通級指導に関するシンポジウム、特別支援教室すばるの研究成果を公開する分科会、上野一彦先生（東京学芸大学名誉教授）による「特別支援教育の充実に向けての課題」の講演から成った。

研究主題とその解説

香川大学では、文部科学省の事業指定を受けて、平成 18 年度から 5 カ年にわたり、「特別支援教育促進事業」を推進してきた。最終年度として、主に特別支援教室すばるの実践研究の成果を発表することを計画した。大会テーマを特別支援教育の「充実」とすることにより、日本の特別支援教育が黎明期を抜けて、次の段階に移ったことを明示した。サブテーマにあるように、指導・支援において重要と思われるキーワードとして「根拠」と「評価」をあげて、シンポジウムと分科会を行うこととした。

【開会式の様子】

【シンポジウム】

発表内容と成果

シンポジウムでは、特別支援教室すばるの実践から得られた成果を、他県の取り組みと比較することにより、その特徴を明確にした。特別支援教室すばるでは、学習のつまずきに応じた教科指導と対人関係や学校生活等の社会性支援を重視しており、その指導・支援した成果をアピールした。

分科会では、特別支援教室すばるの事業成果をもとに、5 つの分科会を設定した。それぞれの分科会担当者が、分担内容について具体的に内容を整理して、事例を挙げて解説したことにより、参加者によく理解され活発な意見交換が行われた。

講演は、発達障害児の教育に長く関わってこられた上野先生の、気さくな話しぶりと通常学級での支援や大学センター入試、テレビ番組等の話題性のある内容を取り上げての講演に、多くの参加者が熱心に聞き入った。

今後の研究課題

大きく 3 つの方向が見えつつある。第一は、県教育委員会と連携して、学校コンサルテーションに取り組むことである。第二は、教育学部の小中学校教員養成のなかに、特別支援教育に関する授業科目群を新設することである。第三に、最新知見に基づいた教育的診断および心理教育アセスメント法の開発を進めることである。

【第１分科会：認知機能のアセスメント】

【上野一彦先生の講演】

平成 22 年度 センター公開講演会報告

第１回　学習評価の在り方と指導要録の改善 —「学習指導」と「行動の記録」— ／ 吉田明史 先生・谷田増幸 先生

平成 22 年 10 月 23 日（土）13 時 30 分より、教育実践総合センター主催の平成 22 年度第 1 回公開講演会が開催されました。演題は、「学習評価の在り方と指導要録の改善－「学習指導」と「行動の記録」－」でした。当日は、公立学校の教員をはじめ、香川県教育委員会、香川県教育センター、高松市教育委員会、香川大学教育学部附属学校園教員、本学教員、院生･学部生など 72 名の方が参加されました。

まず、附属坂出小学校の樽本導和先生と附属高松中学校の植田浩之先生から、学習評価及び指導要録の改善等に関する講師への質問、及び各学校現場における悩みや課題について話題提供をしていただきました。

それを受けて、奈良教育大学大学院教授の吉田明史先生からは、指導要録の改善に関して、その法的根拠や、改善の経緯、観点別学習状況評価の内容、これからの授業についての留意点等、「児童生徒の学習評価の在り方に関するワーキンググループ」における検討内容も踏まえて、学習評価のポイントを押さえ、わかりやすくご講演をいただきました。特に、関心・意欲・態度の評価や、思考･判断･表現の評価など、各学校現場において、難しいと思われる評価の観点について、具体例も交えて、今後の評価の改善につながるお話をしていただきました。

次に、兵庫教育大学大学院の谷田増幸先生からは、道徳教育や特別活動の目標及び内容を踏まえた上で、その両者の評価の在り方と関連づけながら「行動の記録」を中心に、関連する報告書や通知文、学習指導要領等をもとに丁寧にご講演をいただきました。

参加された先生方からは、タイムリーな話題で参考になったとか、お二人の講師の先生方の専門的なお話が聞けて良かった等の感想をたくさんいただきました。その一方、講師の先生のお話をもう少し時間にゆとりを持って聞ければ良かったとか、マイク等の調整に関する問題点のご指摘もあり、それらの点につきましては、今後、改善を図っていきたいと考えております。（文責：宮前義和）

第２回　伝えるということ ／ 池田　修 先生

附属教育実践総合センター主催の平成２２年度第２回公開講演会が、１２月１１日(土)１４時より、香川大学研究交流棟５階において開催されました。今回は、京都橘大学人間発達学部児童教育学科准教授の池田　修先生を講師としてお招きし、「伝えるということ」という演題でご講演いただきました。

当日は、公立・私立学校園の教員をはじめ、香川県教育委員会、香川県教育センター、県内各教育事務所、各市町村教育委員会、香川大学教育学部附属学校園教員、本学教員、院生・学部生など７０数名の方が参加されました。

まず最初に、参加者は二人組になって、一枚の絵（「語り絵」）に描かれたものを言葉で互いに伝え合うという体験的な活動から出発しました。いずれの参加者も伝えることの難しさを実感しました。次に「伝える」ということについての基本的な考え方のお話の後、１点目には、話し言葉や書き言葉の弱点を考えることを通して、それを補うためにはどのような工夫をするとよいかについてのお話がありました。２点目には、伝えるための「三つの観点」（熱意、内容、技術）の紹介があり、その観点に即してさらに具体的な方策についてのお話がありました。最後に三つの観点に基づいた場の設定として、ディベートや学習ゲーム、仮の場としての話し合いなど、資料やビデオを用いて具体的な場の紹介がありました。

先生のお話はいずれも具体的でわかりやすく、時にユーモアを交えて楽しく、あっという間に時間が過ぎていました。また、単なる方法論の紹介ではなく、伝えることについての基本的な考え方や姿勢について，教師としての自らの在り方を問い直すものでもあったように思います。

参加された先生方のアンケートからは、「現場ですぐに活かせる内容」であり、「大変興味を持って聞くことができました」とか、「実践に活かせる具体と理論の両方がよく分かり、自分自身の意欲にもつながるお話が伺えた」、「伝える極意、うろこが何枚も落ちました」など、講師の先生への感謝やお礼の言葉を数多く拝見することができました。（文責：七條正典）

第３回　ゼロトレランス理論に基づく生徒指導の理論と実践的課題 ／ 藤平　敦 先生

附属教育実践総合センター主催の平成２２年度第３回公開講演会が、２月１９日(土)１４時より、香川大学教育学部３１４講義室において開催されました。今回は、国立教育政策研究所生徒指導研究センター総括研究官　藤平　敦　先生を講師としてお招きし、「ゼロトレランス理念に基づく生徒指導の理論と実践的課題」という演題でご講演いただきました。

当日は、公立・私立学校園の教員をはじめ、香川県教育委員会、香川県教育センター、県内各教育事務所、各市町村教育委員会、香川大学教育学部附属学校園教員、本学教員、院生・学部生など６６名の方に参加いただきました。

まず最初に、藤平先生が米国において調査されたことを基に、米国におけるゼロトレランスの理論について、米国における教育改革や学校現場の問題状況を踏まえ、その基本的な考え(割れ窓理論等)を整理し、解説していただきました。次に、米国の公立学校においてその理論が具体的にどのように行われているかＡタイプとＢタイプに分けて紹介していただきました。そして、日本におけるゼロトレランス理念に基づく実践例を３つのパターンに分けて紹介していただきました。最後に、日本の生徒指導にゼロトレランスの理念を参考にできるかについてお話しいただいて最初の講話を終えられました。

その後、参加者からの質問や意見をもとに、協議を行い、本テーマについての研究を深めていきました。講演者の藤平先生からの発案で協議の時間をたっぷりとったことにより、学校現場での日々の実践や、日常の生徒指導に関する悩みを講師の先生を交えて協議できたことは、参会者にとっても双方向性の有意義な講演会になったものと考えます。

参加された先生方のアンケートからは、「ゼロトレランスの理念が明確になりました。」、「わかりやすくて、熱いお話でありがとうございました。」、「ディスカッションの時間があったのが本当に良かったです。」など、講師の先生への感謝の言葉や講演会の持ち方等について、あたたかい評価をいただきました。（文責：七條正典）

平成 22 年度 教育実践総合センター研究会報告

第１回テーマ：今、中学校現場に求められる教員の養成をめざして
－「教職概論（ロ）」の授業を創造する－
日　　時：平成２３年３月１０日（木）１７：００～１８：３０
話題提供：山下　隆章先生（教職実践）

昨年度からはじまった教育実践総合センター研究プロジェクト「教育実習を中心とした学部と附属学校園との連携による支援の在り方に関する研究プロジェクト」（２年間）も最終年度を迎え、総括に向けた準備を進めております。教育実習事前事後指導も含めた学生への支援の在り方、また、教育学部以外の学生への指導も今後一層求められていく様相です。

今回のセンター研究会では、本センター企画推進委員でもあり、本センター研究プロジェクトにもご参加いただいている山下隆章先生から話題提供をいただきました。長年の中学校勤務のご経験に基づき、学校の現況、学習指導要領にみる教育政策の動向、先生から見た本学の中学校教員を志望する学生の現状等をご報告いただきました。こうした現況の中で、先生が着任されてから関わられてきた「教職概論」（人間発達環境課程・他学部生用）の授業実践の工夫をご報告いただきました。提示された資料には、学生からの授業評価や授業全体を通しての感想が載せられ、そこからは教職を目指す学生にとって、大きな意味ある授業であったことが読み取れました。

意見交流では、これからの教職概論の在り方や教科教育と教職教育との関連等、重要な視点からの議論が行われました。（文責：山岸知幸）

第２回テーマ：電子黒板の活用法を探求する
日　　時：平成２３年３月２４日（木）１７：００～１８：３０
話題提供：松下　幸司（附属教育実践総合センター）

全国の小中学校に導入が進んでいる電子黒板を、昨年度末、教育実践総合センターにおいても購入し、当センター演習室(教授法演習室)に設置しました。この電子黒板について、教育現場への導入の経緯と小中学校における具体的な実践事例について動画・写真を用いながら紹介するとともに、教職志望学生のメディア活用力を高めることをねらい、大学の授業(「教育の方法と技術」)において活用した事例について報告しました。またお集まりいただいた先生方に操作体験をいただき、大学講義における活用の可能性についてご検討いただきました。

上述のように、当センターに電子黒板を導入し、演習室に設置しております。本学の先生方に大学講義・演習での積極的なご活用をお願いしたいと思います。加えて、電子黒板を含めた情報メディアを活用した「わかる授業」づくりのための実践的指導力の基礎を養う演習カリキュラムについても検討をすすめていきたいと考えています。（文責：松下幸司）

平成 22 年度 フレンドシップ事業報告

平成 22 年度「教育実践基礎演習(フレンドシップ事業)」は、24 名の受講生の参加を得て行われました。本事業は、学校教育の場である学校から離れた野外において、子どもたちと触れ合う様々な活動体験を通して、子どもの気持ちや行動を理解し、教育実践のための実践的指導力の基礎を身に付けることを目的として実施しています。本年度の主な活動は、以下のとおりです。

■事前研修：５月１９日（水）
野外教育の意義、ならびに野外教育体験活動の日程・内容、
また参加及び引率に際しての諸注意等についての講話を聴く。
■野外教育体験活動(五色台少年自然センター)指導者研修会：６月５日（土）・６日（日）
■野外教育体験活動
Ａ　附属坂出小学校：屋島少年自然の家　　；６月１８日（金）～１９日（土）
Ｂ　附属高松小学校：国立室戸青少年自然の家；７月１４日（水）～１６日（金）
（Ａ・Ｂいずれかを選択し、野外教育体験活動における児童への補助活動を行う。）
■野外教育体験シンポジウム：７月２１日（水）
野外教育体験活動への参加を振り返って、成果と課題について協議し、助言を得る。

受講生に実施した質問紙調査によれば、本事業が「今後の進路の参考になったか」を問う設問に対して、７割以上の受講生が「参考になった」との明確な回答を寄せています。また自由記述によれば、「『教師になりたい』という気持ちを心の中で固めることができました」「教師になりたいという意志が大きなものになっただけでなく、教師に必要な資質というものが自分の中で育ったように感じる」などの意見が挙げられており、本事業が学生たちにとって、教職に対する強い情熱の基礎を形成する契機となっていることがうかがえます。（文責：松下幸司）

第 78 回 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告

平成 23 年 2 月 18 日（金）に、第 78 回国立大学教育実践研究関連センター協議会が東京学芸大学にて開催された。まず国立大学教育実践研究関連センター協議会会長・園屋高志先生、次に文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長補佐・粟井明彦先生、そして東京学芸大学学長・村松泰子先生から、お言葉をいただいた。

その後、部門報告、平成 22 年度会計中間報告、平成 22 年度事業の報告がなされた。また、次期（平成 23～24 年度）の役員（案）が示され、承認された。次期会長は、三重大学下村勉先生である。

それから昼食休憩をはさんで、文部科学省の「学校教育の情報化に関する懇談会」の動向を踏まえながら、デジタル教科書がどのようなものであり、どのように今後取り上げられていくのか、わかりやすくご説明いただいた。次に話し合われたのが、教職実践演習の各大学の進捗状況であった。

・複数の大学で教職実践演習に関する委員会をたちあげて、検討を行っている。教育実践総合センター教員が、中心的なメンバーになっている場合もある。
・いくつかの大学で試行的に教職実践演習を行っている。
・課題として、全学部の教員養成を教育学部としてどのように引き受けていくのか、教育学部 4 年生で教員にならない学生の動機づけをどのようにはかっていくのか､教育委員会等とどのように連携･協力していくのか、教職実践演習における到達目標（社会性や対人関係能力等）をどのように評価するのか、またどのように個々の学生を指導していくのか（複数の教員がペアになって、何人の学生を指導するのか等）といったことがあげられていた。

そして、部門会議が行われ、私は教育臨床部門会議に参加した。各大学の教育実践総合センター教育臨床部門教員の学部・大学院での授業の担当、地域における相談活動、教員研修会の実施等について、互いに発表、質疑応答を行った。

今回のセンター協議会では、教育実践総合センターが教員養成にどのように関わっていくのか、改めて考えさせられた。次回のセンター協議会は 9 月 16 日（金）に横浜国立大学で行われる予定である。（文責：宮前義和）

教育実践集中講座 実践報告

附属教育実践総合センター客員教授　　好井　貞夫

「教育改革」とは、子どもたちのために何が必要なのかを十分に再認識し、使命感を持ち、職務を果たすことが重要であると言われています。教育基本法が改正され、平成 23 年度から小学校学習指導要領の完全実施が開始されます。そして、教員を目指す学生さんが夢を実現して完全実施を迎える年になりました。そのため、「教育のプロ」を目指す講義を県教委義務教育課片岡元子主任指導主事とともに、担当させていただきました。

１　明日への一歩 ～本気で「教師」を目指す人のため～

講義中の姿として、夢の実現が目前。そして、まさに教師像の熱中する視線を受けました。講義内容は、教育基本法を基に教育法規の改正と将来を見据えた学校の再点検を「教育基本法と学校経営力」､「学校教育法等と教師力」､「学習指導要領と生きる力」と生徒指導関係の現状と対応を体罰・懲戒・出席停止・いじめ・不登校問題・児童虐待・携帯電話等として、実力の発揮を伝えました。教員採用試験にチャレンジするための知識として法規への教師の立場と対応、児童と生徒への思いの意識が高まっていました。

２　はじめの一歩 ～「教師」のおもしろさを感じながら～

未来への夢や教師への憧れややりがいが膨らむために、今期待している道徳・総合的な学習の時間・生徒指導の学校現場を「幼児期における道徳性の芽生え」･「要としての道徳教育の在り方」､「生きる力を育む」､「就学前と小学校教育の連携」･「課題に対応する生徒指導の充実」として、連携を重視する指導力を伝えました。

教育実習を終えた人の第一歩を「夢育む教師力向上に挑戦」､「子どもを見ること」として伝えました。子どもとの出会いで、教師の楽しさ・おもしろさ、経験を生かしたやりがい体験等の認識を深めたので､『なりたい』思いが強まっています。

３　夢への一歩 ～子どもたちと共にある「教師」～

教師模倣を「東・南海地震の防災力を学ぶ」､「思いや願いを育み、意欲や主体性を高める学びの充実」として、共に生きる命の大切さを伝えました。子どもと共に学ぶ体験の充実と、感動・感激・感謝の実感を自覚することで、教職が高まっていきます。

突然、東日本大震災が発生しました。新しい担い手になる教師として、世紀超えの教育向上と共に南海地震等の協同対応にも期待します。

教育実践総合センター 活動報告（2010/10～2011/03）

10 月 23 日(土)　第一回公開講演会
10 月 25 日(月)　第六回専任会議
10 月 25 日(月)　教育実践集中講座(第二回１回目)
11 月 24 日(水)　教育実践集中講座(第二回２回目)
11 月 25 日(木)　教育実践集中講座(第二回３回目)
11 月 26 日(金)　第三回教育実習を中心とした学部と附属学校園との連携による支援の在り方に関する研究プロジェクト
11 月 29 日(月)　第七回専任会議
12 月 2 日(木)　教育実践集中講座(第二回４回目)
12 月 9 日(木)　第三回編集会議
12 月 11 日(土)　第二回公開講演会
12 月 13 日(月)　教育実践集中講座(第二回５回目)
12 月 20 日(月)　教育実践集中講座(第二回６回目)
12 月 20 日(月)　第八回専任会議
１月　7 日(金)　第四回編集会議
１月 24 日(月)　教育実践集中講座(第三回１回目)
１月 24 日(月)　第九回専任会議
１月 31 日(月)　教育実践集中講座(第三回２回目)
２月 18 日(金)　第四回教育実習を中心とした学部と附属学校園との連携による支援の在り方に関する研究プロジェクト
２月 18 日(金)　第 78 回国立大学教育実践研究関連センター協議会
２月 19 日(土)　第三回公開講演会
２月 22 日(火)　第十一回学部・附属学校園教員合同研究集会
２月 28 日(月)　第十回専任会議
３月 3 日(木)　第二回管理委員会
３月 10 日(木)　第一回センター研究会
３月 10 日(木)　第三回企画推進委員会
３月 24 日(木)　第十一回専任会議
３月 24 日(木)　第二回センター研究会

寄贈図書（2010/10～2011/03）

立正大学　臨床心理学研究　第８号	立正大学心理臨床センター
ルーテル学院大学　臨床心理相談センター紀要 2010 Vol.3	ルーテル学院大学　臨床心理相談センター
和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 No.20　2010	和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター
パイディア　滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　Vol.18　2010	滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター
横浜国立大学大学院　教育学研究科 教育相談・支援総合センター研究論集　第 10 号　2010 年	横浜国立大学大学院　教育学研究科 教育相談・支援総合センター
カリキュラム研究　第 19 号	日本カリキュラム学会
特別支援教育における ICF-CY の活用に関する実際的研究　平成 20～21 年度研究成果報告書	独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所
知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究　－「キャリア発達段階・内容表（試案）」に基づく実践モデルの構築を目指して－　平成 20 年度～21 年度研究成果報告書	独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所
教育実践研究　第 36 号	金沢大学人間社会学域学校教育学類 附属教育実践支援センター
共同研究プロジェクト　平成 21 年度報告書 富山大学スクラムプラン―学校バリアフリーへの挑戦― 2009	富山大学人間発達科学部・附属学校園
秋田大学教育文化学部　教育実践研究紀要　第 32 号	秋田大学教育文化学部　附属教育実践総合センター
第 16 回　秋田大学教育実践セミナー　－学びの風土をいかに構築するか－	秋田大学教育文化学部　附属教育実践総合センター
第 17 回　秋田大学教育実践セミナー 「教師のメンタルヘルス」～よりよい職場環境をつくるために～	秋田大学教育文化学部　附属教育実践総合センター
第 18 回　秋田大学教育実践セミナー　－学校と保護者のいい関係づくり－	秋田大学教育文化学部　附属教育実践総合センター
教育実践研究　第５号	富山大学人間発達科学部 附属人間発達科学研究実践総合センター
東京家政大学附属臨床相談センター紀要　第十一集	東京家政大学附属　臨床相談センター
臨床相談研究　第８号	東京家政大学附属　臨床相談センター
国立特別支援教育総合研究所研究紀要　第 38 巻	独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所
平成 22 年度　独立行政法人教員研修センター 「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択事業　成果報告	鹿児島大学教育学部
鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要　第 20 巻	鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター
東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要　第７集	東京学芸大学教育実践研究支援センター
鳴門教育大学　学校教育研究紀要　№25	鳴門教育大学　地域連携センター
広島国際大学心理臨床センター紀要　第８・９号	広島国際大学心理臨床センター

教育実践総合研究（第 23 号）原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第 23 号は、**5月 31 日（火）**原稿受付締切です。
以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究 投稿要領

１（投稿の要領）
香川大学教育実践総合研究（以下「教育実践総合研究」という。）への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

２（投稿の内容）
教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料（研究ノート、研究動向の紹介など）及び香川大学教育学部附属教育実践総合センターの活動報告などを掲載する。

３（投稿者）
教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議（以下、「会議」という。）が特に依頼した者とする。

４（投稿原稿の提出方法）
投稿原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロで作成し、ワープロ打ち出し原稿２部と、原稿を保存したフロッピーディスク等を会議に提出する。

５（投稿原稿の長さ）
投稿原稿の長さは、刷り上がり１４頁（１頁は２１字×４２行×２段）以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

６（刷り上がり１頁目の形式）
刷り上がり１頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属（所在地）、和文要旨（200 字）及びキーワード（５語）を含むものとする。

７（投稿原稿の取り扱い）
投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。
査読者については、会議において決定する。
（１）採　録
（２）条件つき採録
（３）返　戻

８（校　正）
校正は原則として３校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。
その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附 則　本要領は、平成元年５月１７日から施行し、
平成元年４月１日から適用する。
附 則　本要領は、平成１２年３月６日から施行し、
平成１１年４月１日から適用する。
附 則　本要領は、平成１７年１２月１４日から施行し、
平成１７年１１月９日から適用する。
附 則　本要領は、平成１９年４月１日から施行する。

香川大学教育学部附属教育実践総合センターニュース
（No. ３３）

発行日 平成２３年３月３１日
編集発行 香川大学教育学部附属教育実践総合センター　**代表者** 七條 正典
URL http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/　E-mail jcen@ed.kagawa-u.ac.jp
〒760-8522　高松市幸町１－１　Tel. 087-832-1683　Fax. 087-832-1689